［書評］

藤原帰一・永野善子編著
『アメリカの影のもとで
――日本とフィリピン』

日下　渉

Ⅰ　はじめに

日本とフィリピンは、これまで有意義な比較の対象とは捉えられてこなかった。日本はいわゆる先進国として経済的繁栄を謳歌してきた一方で、フィリピンは経済発展に失敗し、未だに深刻な貧困問題を抱えたままである。日本とフィリピンの間に共通性を見出すことは難しいとされ、両者の関係は優劣という序列的な差異の言葉で語られてきた。こうした一般的な感覚に対して、本書は両者の間にアメリカという第三者を持ち込むことで、これまで省みられてこなかった日米比という三者間の相互関係に光をあてる。

日本とフィリピンはともにアメリカとの戦争に敗れ、その圧倒的な影響のもとで錯綜した関係を結んできた。清水（本書：257）の言葉を借りれば、「日本とフィリピンはアメリカの明確な意図と戦略のもとで親米的心性へと飼いなされてしまった同類」、「アメリカを父とするアジアの異母キョウダイ」として捉えることができる。さらに永野（本書：156）が指摘するように、日本におけるバブル崩壊以降のグローバル化の進展を背景に、日本とフィリピンをアメリカ化という同じ枠組みの中に改めて投入することが可能になってきたのである。

Ⅱ　本書の内容

日本とフィリピンは、どのようにしてアメリカの影のもとへと導かれていったのだろうか。序章「二つの帝国の物語――後発植民地主義としての日本とアメリカ」（藤原帰一）によれば、日本とアメリカは共に19世紀末に出発した後発の植民地帝国であり、互いに競い合う関係にあった。ただし、アメリカは進歩的な普遍主義を掲げて、公式の植民地を維持しない非公式の帝国を拡大させたのに対して、日本は人種的な汎ナショナリズムを掲げて、領土的支配に固執した。周知のように、これら2つの帝国の競合はアメリカの圧勝に終わり、日本はアメリカの支配下に置かれた。この時、アメリカによる日本の占領政策は、実はフィリピン植民地統治の経験に基づいていた。こうして日本は、フィリピンと共にアメリカの影のもとに入ることになったというのである。

それでは、そもそもアメリカはフィリピンでどのような統治を行ったのだろうか。第1章「フィリピンと合衆国の帝国意識」（ジュリアン・ゴウ）は、その特徴を明らかにする。アメリカの帝国主義をめぐっては、アメリカの「価値」や「伝統」ゆえに、支配地の住民に自由と民主主義を与えるリベラルな特徴を持ってきたとする意見がある。しかしゴウに

よれば、アメリカによるリベラルな帝国の起源は、自由・民主主義・自治政府を求める現地エリートのなかにあった。アメリカは、フィリピンの支配を正当化し効率化するために多くの調査を行い、フィリピン人の積年の願望と要求を理解すると同時に、それらを自らの言葉で作り直して流用し、統治政策に反映させていったのである。

アメリカはこうしたフィリピン統治の経験に基づいて、戦後の日本でもエリート支配を再構築した。ただし、第2章「戦後日本とフィリピンのエリートの継続性——アメリカの影響」（テマリオ・リベラ）が主張するように、その帰結は両国で大きく異なった。日本では、GHQが戦争を主導したエリートの公職追放と農地改革を断行した後に、反動的な「逆コース」を行った。その結果、政官財における保守的エリートのヘゲモニーが確立し、そのもとで日本は繁栄を謳歌した。他方、戦後のフィリピンでは、貧農の支持を得たフク団がエリート支配に対抗する新興勢力として台頭したものの、アメリカはそれを共産主義の脅威とみなして弾圧し、農地改革を求める声も蔑ろにした。またマッカーサーが対日協力者のロハスを戦後政治の指導者に仕立て上げたため、対日協力問題をめぐるエリート間の亀裂がエリート支配を揺るがす可能性も回避された。こうして寡頭エリート支配が持続し、その下でフィリピンは苦しみ続けたのである。

またアメリカは、占領国における親米的な国民統合を促進するために、現地のシンボルを無害化して活用した。第5章「象徴天皇制とホセ・リサールの神格化との比較考察」（永野善子）によれば、戦後日本の復興を基礎づけたのはGHQと日本人エリートの協働であり、そのモデルはアメリカによるフィリピン統治であった。アメリカは両国の現地エリートとそれぞれ協働することで、ホセ・リサールを神格化し、象徴天皇制を導入した。ただし、リサールの神格化は、穏健な改革主義者としての性格を強調することで、独立を求める革命のエネルギーを遮断することが目的であったのに対して、象徴天皇制の導入は、昭和天皇の戦争責任を不問に付しながら日本の戦後復興に利用するためであった。

こうしてアメリカの影響下で両国の戦後復興がすすめられたものの、アメリカとの戦争の記憶が簡単に忘却されたわけではなかった。第3章「日本との戦争、アメリカとの戦争——友と敵をめぐるフィリピン史の政争」（レイナルド・C・イレート）が指摘するように、アメリカは1902年以降、検閲や学校制度を通じて、多大な犠牲をもたらした比米戦争の記憶を忘却させ、アメリカはスペインの圧制からの解放者であるという記憶を創出していった。フィリピン革命も無慈悲なカシケと非合理な群衆が引き起こした騒乱にすぎず、1898年に設立された共和国も未熟でアメリカの後見的指導が必要であったというのである。しかし日本軍による占領が始まると、改めて比米戦争の記憶を呼び起こそうとする試みが行われた。しかし日本軍の暴力に対する怒りを背景に、フィリピン人とアメリカ人兵士による共通の受難、死、復活という解釈が強まり、比米戦争の記憶は再び忘却させられていった。

第4章「二つの戦後60年——比米戦争と第二次世界大戦の記憶と哀悼」（中野聡）も、戦争の記憶に着目する。中野によれば、フィリピンでは、喪われた革命と比米戦争に対する哀悼の欠如に対する記憶の反乱として、革

命家の魂と会話する能力をもった者たちが民衆蜂起を繰り返した。他方、日本人による戦没者慰霊も、戦没者を忘却する社会に対する記憶の反乱であった。ただし、日本の「英霊」が戦地で救出を待ったのに対して、フィリピン人革命家の魂は時空を越えて民衆反乱者に取り憑いた。こうした魂の自由奔放さは、圧倒的な力による敗北の経験の積み重ねによって、過去と現在の記憶が同一の平面状にちりばめられたためだと解釈できる。日本における記憶の反乱は、戦没者慰霊に協力するフィリピンという他者の助けを得て悲哀の仕事を完結した。だが、フィリピンにおける悲哀は完結しておらず、日本人による戦争の忘却は新たな抗議を生じさせかねない。

アメリカとの戦争、日本との戦争という経験は、フィリピンに相対立する影を投影することになった。第6章「対抗する陰影〈日本〉と〈アメリカ〉――フィリピン系アメリカ人のなかで」（アウグスト・エスピリトゥ）によれば、日本とアメリカは「対抗する陰影」として異なる形でフィリピン人の人生を形づくり、彼らの忠誠心を支配してきた。親日的な見解は、アジアにおける日本の指導力や東洋の精神に価値を見いだすと同時に、アメリカの植民地的権力や人種差別主義を否定する。これに対して、親米的な見解は、アジアに対する日本の帝国主義と残虐さを非難し、アメリカのリベラリズムを希望とみなし、アメリカはフィリピンと日本の上部もしくは外部に位置しているとみなすという。

日米比の権力関係は、親密圏の政治にも重要な影を投げかけている。第7章「権力の三重奏――フィリピン人、日本人、植民地権力の居場所」（鈴木伸枝）は、日米比の三者関係に着目することで、北の男性による南の女性の支配といった表象に収まりきらない日比夫婦間の交渉や力関係の逆転を明らかにしている。日本でもフィリピンでもアメリカはモダンの象徴として憧憬の対象であり、日比夫婦の関係性はこうしたアメリカに対する夢想のもとで偶発的に形成されている。フィリピン人女性は、英語といったアメリカのシンボルを活用し、また「優しいアメリカ人」のように振舞うことを日本人の夫に求めることで、既存の権力構造に交渉する。しかし、日本人男性がフィリピン人女性によって自らの優勢性が覆されたと認識すると、暴力によるヒエラルキーの回復を試みることもある。

個人に投影されたアメリカの影は、時に政治の世界で重要な役割を果たす。第8章「アメリカの磁場のなかの自己形成――山口百恵と小泉元首相をとおしてみるヨコスカと戦後日本のねじれ」（清水展）によれば、横須賀で生まれ育った小泉元首相は、米軍基地が体現する暴力的なアメリカを忌避すると同時に、映画や音楽のなかのアメリカに憧憬を抱くという分裂した志向を抱きながら自己形成をした。こうした両者を行き来し、どちらにも安住できないという疎外感・違和感は、小泉の虚無とニヒリズム、そしてその反面としての率直さを形成した。小泉は、横須賀においてアメリカによって劣位に位置づけられてきた日本の受苦と受動性を直接的に経験したが故に、それを諦観しながらも、覚めた情熱を持ち政治に積極的にかかわっていった。

このように、各章の着想は大変興味深く、非常に刺激的な議論を提示している。とくにリサールの神格化と象徴天皇制の比較や、エリート支配の再構築がもたらした対照的な帰結への着眼は、日比比較研究の重要な可能性を提示している。また度重なる抑圧からの解

放を求め、時空を越えて憑依するフィリピン人革命家の魂には、思わず胸が熱くなった。

ただし、十全に展開しきれていない議論も散見された。とくに、なぜ日本とフィリピンはアメリカによる類似の支配を受けながらも、かくも異なる戦後を歩んできたのか、という共通性から生じた差異についての説明が不十分であるように思われた。政治学的にいえば、なぜフィリピンではアメリカ支配のもとで「強い社会、弱い国家」(Migdal, 1988) が形成されたのに対して、日本ではその逆が生じたのかという問題である。さらに惜しむらくは、本書には全体を包括する章がないため、本書が切り開いた新たな視座から導き出しうるメッセージが拡散してしまった感を否めない。次節では、本書から受けたインスピレーションをもとに、私なりの解釈を加えてみたい。

Ⅲ 「恩恵」に反乱する異母兄弟

本書は、知らなかった親類が突然現れて、自分の知られざる過去について語りだしたような当惑を与える。「アジアの異母キョウダイ」という清水の比喩を援用して議論を展開するならば、日本もフィリピンも、周到に準備されて祝福されながら生まれた子供たちではなかった。アメリカによって母なる大地が強姦されて産み落とされたうえに、親米的心性のもとへ去勢され、その暴力的な出自についても忘却させられて育て上げられた子供たちである。こうして育った2人の異母兄弟が邂逅し、複雑に絡まりあったお互いの出自と苦渋の歴史を改めて知る。だが、自らに刻み込まれた父なるアメリカの影を消し去ることは、もはやできない。本書は、そのような困惑の契機を読者に突き付ける。

まず、本書によって喚起されるのは、父の暴力と支配についての忘却された記憶である。私たちはフィリピンという異母兄弟を通じて、アメリカの戦略のもとで生まれ育てあげられた自らの姿を改めて知ることになる。アメリカはフィリピン支配の経験に基づいて戦後の日本を統治したのであり、そこには重要な共通点が存在する。その特徴は、圧倒的な軍事力によって侵略した後に、進歩的かつ改良主義的な統治によって他国の支配や軍部の暴走から両国を「解放」し、ナショナリズムを親米的心性の鋳型のなかに封じ込め、飼い慣らしたことであった。アメリカは、この「解放」のプロジェクトにおいて厳しくも優しき父として立ち現われてきた。本書の多くの章は、フィリピンと日本におけるこうした解放の物語の欺瞞を暴き出している。

次に、本書はフィリピンとの知られざる血縁関係を示すことで日比関係に再考を迫る。一般に日本とフィリピンの関係は、先進国と途上国といった二項対立で捉えられてきた。しかし、フィリピンは劣位の他者などではなく、同じ父を持ちながらも戦争による遺恨を抱え、またより困難な境遇を強いられてきた兄弟であった。日本の帝国主義はアメリカのヘゲモニーを打開する可能性を秘めていたものの、日本軍の暴力は皮肉にもフィリピンの親米感情を強化させた。しかも、日本は経済成長に成功した一方で、アメリカの寵愛を受けたはずのフィリピンは経済的停滞を余儀なくされた。私たちは、こうしたフィリピンとの数奇な血縁関係を再発見することによって、遺恨の歴史と非対称的な権力関係を孕む、矛盾に満ちた奇妙な歴史の共約可能性を見出すことができる。

そして、この着想を敷衍することによっ

て、フィリピンだけでなく、インディアンに始まり、ベトナム、アフガニスタン、イラクへと続くアメリカの「解放」の対象とされた無数の人びととの間に、忘却された血縁関係を再発見することができる。アメリカから受けた共通の受難の発見は、こうした他者を自己とは切り離された無関係の存在ではなく、様々な軋轢や矛盾を孕みながら自らと何かを共有する理解可能な存在として捉え直すことを可能にしよう。

とりわけアジアにおけるアメリカの長子フィリピンが110年以上にわたって経験してきた苦渋の歴史は、アメリカの愛が繁栄を保証するものではないことを露骨なまでに示している。こうした数奇な共約可能性に対する着想は、今日グローバル化の名のもとでアメリカの影が有無を言わさずに世界を覆い尽くし、日本でも閉塞感と不安感が立ち込めるなかで、アメリカが標榜する恩恵の欺瞞を看破し、そのヘゲモニーに対する抵抗と解放の基盤を練り直していくにあたっても重要な契機にもなろう。

（参考文献）

Migdal, Joel S. 1988. *Strong Societies and Weak States: State-Society Relations and State Capability in the Third World*, Princeton: Princeton University Press.

（法政大学出版局、2011年6月、四六判、320ページ、定価3,200円［本体］）

（くさか・わたる　京都大学）